

〔空穂物語藏開上一〕左大將たゞいまはあぢきなくぞ侍あるじのおとゞ御ときよきうちわらひ給へばひとたびにはほゝとわらふいとこゝちよげなり

〔枕草子二〕三位中將いとなをき木をなんをしおりためるときこえ給ふに、うちわらひ給へば、みな何となくさとわらふこゑきこえやすらん

〔源氏物語六〕末摘花たゞむゝとうちわらひて、いとくちをもげなるも、いとおしければ、出給ひぬ

〔書言字考節用集八〕莞爾ニツ文選註、微笑同

〔名物六帖人事四〕解顏正集也、暎堂衆皆笑也、絶倒嘆羨之甚也、韻府以爲極笑、非也

〔嗔囊抄三〕ニツコトワライト云何字ゾ

莞爾ト書テニコヤカ也トヨム、仍テ莞爾ノ二字ヲ、太平記ナドニモ、ニコトワラフトヨマセタリ、

論語ニハ、夫子莞爾而笑曰クト云リ、少シ笑貌ト註ス、其心叶ヘリ、委クハニコヤカニワラフト云

心歟、但遊仙窟ニハ、瞋睨トニコヤカナリトヨメリ、是モ目篇ノ字ナレバ同心歟、

〔名物六帖性行笑啼〕匿ワラヒテカクニス笑冷齋夜話聞ワラヒテカクニス忍東軒筆錄坐客

〔燕居雜話一〕くつゝ。笑。

方言に、くつゝわらふと云は、ひそく。笑ふとなり、宋洪遂が侍兒小名録云、隋煬帝幸月觀、中夜凭蕭妃肩、說東宮時事、適有小黃門映薔薇叢、調宮婢衣帶、爲微刺骨結、笑聲吃々不止云云中くつゝは吃々の字なり、

〔日本書紀二代〕一書曰中天鈿女乃露其胸乳、抑裳帶於臍下、而笑嚙向立アサワライテ

〔更科日記〕そのかへる年の十月廿五日、大嘗會御禊との、しるには、つせの精進はじめて、その日京を出るに、略中二條のおほぢををしわたりていくに、さよにみあかしもたせ、ともの人々上ゑすがたなるを、そこらさじきどもにうつるとて、いきちがふ馬も車もかち人も、あればなぞこと